

---

# 竜の息子

風竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の息子

### 【Nコード】

N4365M

### 【作者名】

風竜

### 【あらすじ】

橘 平蔵の息子である橘 蓮次、ある日言い渡されたのは川神学園への教育実習

止めてくださいマジで！俺はもうあいつと戦うのはゴメンなんだ！！

この話は、主人公橘 蓮次が苦難の中で成長していく物語……  
・ではありません

どちらかと言うとドタバタコメディな気がしなくもない

## ぶろろーぐ(前書き)

Arcadiaで掲載していた作者です

二重投稿という形になりますがすみません！

こっちでの更新が主になると思います

ぶるるーぐ

俺の名前は橘蓮次、龍名館館長橘平蔵の息子である

息子って言っても養子だが、それでも俺を引き取り育ててくれた親父には感謝している。

例え地獄のような鍛練や知り合いたくなかった人外系人物達と知り合う事になっていてもだ。

そしてこの日…そうこの日の親父の言葉から始まったのだ

ああ過去に戻れるなら戻りたい

「はあ？川神市に行けってなんであんな人外魔境の一つに行かなきゃなんねえんだよ」

朝の…つか早朝5時前には起床して飯を喰っている最中に突然親父が言い出した

ぶつちやけ碌な思い出が無いんだが…あの世界を間違えたとしか言いようがないガールズの一人が居る場所に…

今でも思い出すあの女のキラリとした狩人の眼…『次に会う時を楽しみにしてる』とかではなく『貴様は私の獲物だ！忘れるな』の類だと思っ絶対

正直会いたくない…否絶対に会いたくない。

「ふむ、お前もそろそろ教育実習であろう。ならば、と旧知の学園長に話しておいたのだ」

「学園つて…川神鉄心がやってるあの」

「そう『川神学園』だ」

その瞬間、俺は全てを悟った

「すまん親父、ちと旅に出て来るわ。具体的に言えば海外に」

一刻も早く日本を脱出しよう。でなければ俺の命が危うい  
大学は残念だが諦めよう命の方が大事です。

「残念だが、そうはいかな。既に話してあると言ったであろう?。」

その言葉と共に開け放たれる玄関とゾロゾロと現れる人間

て！よく見たら川神院の修行僧達じゃねえか!?

「橘様、唯今到着いたしました。」

「うむ御苦労、では早速始めてくれ」

「分かりました、では」

そう言って繰り広げられるは段ボール及びガムテープで引っ越しか  
!?

なにやっちゃってんのこの人たち！？てか止めないと強制的に逝かされる！（誤字に非ず）

「させてたまるかあ！」

「ふん！残念だが止めたければこの儂を倒してから行けい！」

そう言つて驚異的なスピードで目の前に立ち塞がる親父…否！我が人生の敵！！

その後ろでは着々と進行する引越し作業…てか早！もう大分進んでる！？

既にダンボール3つ分を終えている…だと！？ヤベエ！！

「そこを退けや！このクソ親父がああああああ！！！」

「この愚息がああああああ！！！」

ゴウツ！と風を切る音とゴシヤ！と肉を打つ音が響く

橘家伝来のKATARRIAI、防御は一切なく拳と拳で文字通りKATARRIAI正義は勝者に与えられるのだ!!

「ほお？大分やるではないか…だがまだ甘いわ!!」

「今回ばかりは負けられるかあ!!」

殴り合いとう名のKATARRIAIをしていた結果、物の見事に引越し作業は完了されてしまった。

つか早すぎだろ!？来てから10分も経ってねえよ!!

序にKATARRIAIは引き分け…つか時間切れの為俺の負け、はあ…鬱だ。

「さて、引越しの作業も済んだ事だ。お前も早く行った方が良かったら」

「はあ…そつだな……」

「まったく、何時までもウジウジとしおってからに。」 喝!!!!」



その瞬間震度3弱の地震が感知されたそうだ

マジで人間じゃねえよなこの人も

「その息子だという事も忘れるでないぞ」

「読心術!？」

その後財布が無い事に気付き捜したところ全く見つからない  
どうやら荷物に紛れて持っていかれてしまったようだ。

「向こうまでの移動費出してくれ」

「ちょうど良い鍛錬になる、走って行けい!!」

再びKATARRIAIが勃発するも今度は惨敗…ダメージが抜けき  
つてなかった

瞬間回復…だと!?!ズルイぞ親父!!

結局走って向かう事になった…ちくしょう

あ、乙女とレオそれにお嬢に挨拶するの忘れた

## ぶろろーぐ(後書き)

ども、色々あって投稿する機会を逃した作者です

ごめんなさい！言い訳です。

相変わらず駄文ですがこれからもよろしくお願いします

だいいちわ(前書き)

改行を修正しただけです…前投稿箇所は大体そのままの予定

だいいちわ

「うう……川神市の場所を聞くのを忘れるとは」

軽く50km程走ってから気づくってどんだけボケてんだよ俺

携帯も荷物に紛れて持ってかれてたし、交番で聞くんなんて随分久しぶりな事をする羽目になったし。

しかも聞いたら見当違いな場所だったらしくほぼ逆方向に走っていったらしい……これが防衛本能の成せる業か

逃走したいのは山々だがそんな事をすれば親父に比喻表現無しにぶっ殺される為俺には行くという選択肢しか残っていない。

前門の大魔神、後門のゴジラだったらまだ大魔神の方がマシな気がしなくもない……静める算段があるだけ

そんな訳で無駄に開いた距離を走る羽目になった俺

跳ぶ？馬鹿言っちゃいけない、奴の闘気センサーに引つかかるなんて愚行を起こす訳にはいかん……それが例え短い間だったとしてもだ！

てな訳で気を全力で押さえながら川神市に向かって全力疾走しました。

そして着いた川神市・川神院前

嘗て短い間だったとはいえ世話になった場所……半分ぐらい爺さんが百代辺りとバトってたことしか覚えてないが。

「まずは鉄心の爺さんに挨拶に行かなきゃなんないんだよな」

新学期からの俺の就任手続きとか住所とか…はあ面倒臭い

大魔神が居ない事を祈りつつ門の影から中をそっと覗き……後悔した

「はっ！！」

かけ声と共に放たれる足撃…そして発生する“竜巻”

そして竜巻に巻き込まれ空高く吹き飛ばされる対戦相手

「ぐはっ！？」

巻き上げられた対戦相手は地面に激突…気絶しており再起不能になった

この間僅か3秒…文字通り秒殺だった。

「それまで！勝者、川神百代」

ドクンツ！と鼓動が高鳴る、恐怖？畏怖？違う…これは闘争心の高鳴りだ

強者と闘いたいという武士としての本能が戦えと訴える

のを即座に全力で静めた。

本能に身を任せれば俺の平穩は即座に終了&ストレス解消に付き合  
わされ毎日バトルなんて事になりかねない。

闘うのは好きだがバトルジャンキーと闘うのはもう懲り懲りだ、  
—  
か月間の悪夢を俺は忘れない

「む？この気は……まさか！」

げっ！？気づかれた！

逃走…無理！あいつの方が早い、闘う？論外！ならば……！！



はっきり言って今回の相手もつまらなかった。

たった一撃、それも本気ではない一撃で終わったからだ。

「（やはり奴しかないのか？私を本気にさせてくれるのは…）」

普段はとぼけているが中身は本物の猛者だったあの男

5年も昔の話とはいえあの時の事はよく覚えている…九鬼 揚羽と並ぶ、いやそれ以上の戦いの興奮を

アレは私と同じだ…強者と闘う事を至高とする者…果たしてどれだけの果実になったか、ふふ楽しみだ…ん？

「む？この気は…まさか！」

ザッ！

「橘 蓮次！……………む、誰も居ないだと？」

辺りを見渡せど有るのは何時も通りの風景

後は何故か山積みになされている段ボール

「段ボール？なぜこんな所に段ボールが……………まさか、ふんそう言う事か」

そして私は段ボールの山に足を向け

「橘 蓮次そこに居るのは分かっている……………さっさと出で来い」

……………

反応は無し…か

ならば、出て来させるまでだ

「出てこないつもりか？ならば出て来させるまでだ。」

気を手の平に集中させ

「か…わ…か…み……………」

と、そこまでして唐突にやる気が削がれた。

傍目に見れば段ボールに話しかけているようにしか見えない事に気が付く

「ふう、アホらし。やっぱり 段ボールの中に隠れるなんてあるわけないよな」

ううむ、このイライラは大和で解消するか

s i d e o u t

ふい〜〜〜どうにか誤魔化せたか、あのまま放たれてたらヤバかった

それに一応立ち去ってから5分はそのまま待機しておいてよかった、  
フェイントとばかりに戻ってきたしな

いやあ、叔父貴に習った段ボール戦法が利いて良かったぜ

流石某蛇の人も使ってるだけの事はあるな！

「ちょっと、川神院に何か用でもあるの？」

「うお！？吃驚した……てお前まさかワン子か？」

「え？アタシの事知ってるの！？」

犬耳をピョコピョコと動かしているのが幻視<sup>み</sup>える

うん、お前は変わってないな

「蓮次だよ、5年ぐらい前に一緒に遊んだろっが」

「え？……………あ！もしかして蓮兄！？いやあすっかりかわ……………」

あれ？」

はいはいどうせ俺の外見は変わってないよ

酒を買おうとしても身分証明書を提示される外見ですよ

つか全く変わって無いのにも関わらず思い出せないって……5年も経ってりゃしょうがないのか？

「そ、それはそうとどうしたの行き成り！あれから全然来てくれなかったのに」

ああ…まあ色々有ったんですよホントに色々

怪物退治したり叔父貴の軍艦が港に突っ込んできたり…後はアレだ、思い出したくない。

「ちょっと色々あってな、実はこっちにしばらく厄介になることに…えっ？」

そこまで言つとワン子の姿が消えた…というか

「お姉さまあ！蓮兄がしばらくウチで暮らすって来たよ！！」

大声で川神院に突撃していくワン子の姿があった

ワン子もおおおおおおお！！…？…ちよ、おま何やってんのおおおお  
おお！！…？…？

## だいいちわ（後書き）

くあとがきっぽいもの

キャラの作者的イメージ（1）

橘 平蔵… つよきす世界においての最強の男… もとい漢。後  
は…ブルマ好き？ は鉄心の影響かと思う今日この頃

川神 鉄心… 世界最強の老人、現在であれだけ強いなら現役時  
代ってどんだけ？タカヒロワールドの頂点に君臨する男と思う

川神 百代… 人類最終兵器、なんていうかもうこの人以上に強  
い人っているの？戦闘の負傷も瞬間回復でそく疲労とともに全回復  
なんて反則過ぎじゃね！？

タカヒロワールドの人が全員戦争参加してたら勝てたと思うのは俺  
だけではないと思う

## だいにわ(前書き)

前回からの続きを書いているが上手く行かない  
戦闘はとりあえず書いて先に進めた方が良いでしょうか？



だいにわ

いたい、イタイ、痛い！視線が猛烈に痛い！！

ワン子に俺の存在を百代にバラされた直後、文字通り“飛んで”きた時は『終わった』と本気で思った。

大袈裟？ハン！ならば、霸王の如き覇気を出しながら目を光らせ獲物を目の当たりにした肉食獣の笑みをした百代と対峙してみると言いたい。

もうあれは人間じゃねえって！あの状態の百代と闘うぐらいなら俺は米国に…いや、世界に一人で喧嘩売る！

ああ…なんだってあの時勝ってしまったんだよ俺！

というよりも俺が勝利と引き換えに内臓数か所損傷、頭蓋骨損傷、複雑骨折2ヶ所、単純骨折3か所、筋肉断裂2ヶ所、打撲、捻挫、毛細血管破裂多数という大怪我を負って

尚且つ力尽きて一週間寝っぱなしだった俺と比べて終了後僅か1時

間もしないうちに完全復活したという敗者である百代……勝った方がダメージが大きいってなんだよそれ。

その後目が覚めた俺を待っていたのは目を爛々と光らせた百代（霸王）がリベンジをしつこく迫ってくる地獄が待っているとのおまけ付き……得るものは多かった、不要なものがない

「……と、いうわけなんじゃが氣にとるかの？」

はっーやべ

「すみません、聞いてませんでした。」

あまりの視線の痛さに現実逃避をしていたらしい

けど、現実に戻ったら胃が痛い……

「やれやれ、まあ流石にこれだけ威圧感を出されておっいたら気になるのは仕方ないじゃろ」

「いやはやこれだけ殺気を向けられても気絶していないと八随分と腕を上げたようだネ蓮次」

「いやいや分かっているなら止めてください、部屋に3人で話すって環境にしてくれたのは非常に感謝しますけど」

襖の外から俺にピンポイントで殺気を送るのはマジで勘弁して下さい。

修行僧や動物達なんかみんな逃げ出してるんですよ？

「まあ気にしとつたらこの先やって行けんじゃろって」

「ずっとこの視線に耐えるんですか？」

「耐えられんのならば百代との死合いを受けるしかないじゃろ」

そうですね、そう言う約束になったんですもんね。

く遡ること少し前く

「やはりお前だったか。橘 蓮次：まさか本当に段ボールの中に隠れていたとはな。」

「伯父貴直伝の隠匿術だ。中々分からないものだろ？」

気を“消す”のではなく周りと“同化”させるのがミノです…伯父貴は存在感が隠れてないけど

それと気迫…つつか闘気がビシビシと痛いです。物理的に昇華されてる闘気を垂れ流さないで下さい空気が歪んでるし！

本当は逃げたい…でも逃げ出せない、この女に弱みは握らせられるのだけは絶対に避けねばならない。

あくまで余裕の構えを崩さず、しかし背中では冷や汗がダラダラと流れている……ポーカーフェイスが辛い

「まあいい…あれから5年、お前がどれ程の果実になったか楽しみでしょうがないぞ私は！」

更に闘気が増加する…もうビシビシじゃなくてズンツン！て感じ…

だ、誰か！ この荒ぶる大魔神を沈めてくれ！！ワン子！川神院の皆さん！？

助けを求めようとあたりを咄嗟に見るも

ワン子…目をキラキラと輝かせてこちらを凝視、完全に止める気なし…というよりも喜々として推奨するだろう

川神院の皆さん…辺りに誰も居らず、というよりも全員道場内に避難している？薄情者お！…だが、その判断は正しい

結果、逃げ場無し

「さあ、久しぶりに死合おうじゃないか…！」

やる気…もとい殺る気満々な百代

え！何？詰みですか！？来て初日に死亡確定！？

「これ待たんか、百代。残念じゃがその勝負は当分お預けじゃ」

お…おおおお！…やべえマジで鉄心の爺さんに後光が見える

「あ、お爺ちゃん」

「じじい…どういふことだ？」

今の百代を一言で言うならば修羅…目がヤベエというより嫌な光が走っている

「なに、蓮次は今回川神学園に教育実習性として来る事になったっての。そちらの準備がまだ終わつたらんのじゃ」

「え？それならその後なら闘っても良いんじゃない」

こらワン子！余計な事言うんじゃないやありません！

「ふむ、お主らのほうから仕掛けるのは禁止となっておるが…まあ蓮次の方から申し込む分には問題は無いんじゃないかの？」

「死合いはお断りだったの、また一週間寝込む事になりかねん」

「ふうん……なあ爺、それは蓮次の方から言ってくればいいんだよな？」

「ふむ、そのとおりじゃ！」

気のせいだろうか？なぜかキューピーンとばかりの擬音が聞こえたような……

「それと家での訓練は一緒にやってくれと平蔵から言付かっておるのでな、まあ軽い手合わせ程度ならその時でもやるがいいぞい」

「へえ……そりゃ楽しみだな」

結局百代とやり合う事になるのかよ！……まあ死合いじゃないだけマシって事で良しとするか

普通にやり合う分なら大したことにならねえだろうしな

「まあ鍛練に付き合っただけなら良いか……!?」



何故だ？今何かとんでもない事を口走ってしまった気配が！？

「ほっほっほ、ならば付いて来なさいこれからの事で説明をするのでな」

「あ…はい、よろしくお願いします。」

「え〜〜？やんないの？面白そうだったのに！」

ワン子…無責任な事言わないでくれ、それとさっきの仕返しに肉ガムくれてやる。

「もぐもぐ……おお！これは意外と美味しい系」

まったく嫌がらず、寧ろ気に入ったらしい……

味覚まで犬よりなのかワン子よ

で、現在。

俺はあの時百代が大人しく引き下がった理由が嫌という程理解した。つまり、俺の方から申し込まざるを得ない状況に追い込むという事にしたのだ。

序とばかりに先の鬱憤を乗せた視線…ていうより殺意？が俺にピンポイントで集中しているのだ…不機嫌な事に変わりは無いらしく動物や修行僧の皆さんは一時的に待機という状況

「まあ鍛練時に適度にガス抜きすれば問題ないじゃろ」

「百代は最近力を持って余っていてネ。残念だが頼めるのは今のところ蓮次居ないんだヨ」

ああ、確かルーさんより強かったんだよね百代

ルーさんやワン子みたいなのと闘う分には問題ないんだが……百代が相手だと歯止めが一切利かないんだよな……したら俺が殺られかねん。

なんていうの？怪人と闘うか怪獣と闘うかの違い……うん、あまり外れていない。

「はあ……がんばります。」

うう……胃薬買ったほうが良いかもしれん

「さて、では先ほどの説明をやり直せねばな」

「今度は聞き逃さないようにネ」

「……申し訳ありません」

「まあ此処で言うのは簡単な事だけじゃ、蓮次には新学期から2・Fの副担任という位置づけとなり…うむ社会？を担当してもらおうかの」

「社会??」

「ウチの学園は少々変わっておっての社会科が?と?に分かれておるのじゃ」

「細かい事は実際にやればわかるヨ」

「……わかりました。」

「では後は住む部屋じゃな、奥の部屋が空いておるのでそこを自由に使ってもらって構わん、荷物はもう運んである筈じゃ」

「やっぱり此処なんですか?」

「それを含めて平蔵とは話がついておるからの」

「さいですか、親父……帰ったら本気のKATARIAIだな

息子の根性見せたらあ!!」

そして今日一日で溜まりに溜まった精神的疲労の為、飯も食わずに

そのまま寝た

だが、これが大きな間違いと知ったのは翌日

「さあさあ！川神 百代 VS 橘 蓮次 の賭け札は此処だよ！」

懐かしき風間ファミリーが俺と百代の対戦で賭けごとをやっていた！

「すまないが百代殿に2枚」

「では私は蓮次殿に1枚」

そこお！あんたら何身内の勝負に賭け事をかましてやがりますか！？

鉄心の爺さん！爺さんは何処だ！？

「ふむ、ではワシも百代に1枚」

「ボクは蓮次に1枚頼むヨ！」

賭けに参加してる！？

最高責任者＋師範代なにしてやがんだこらあああああ！！

え？あれを見る？

て…何々、試合に関する注意書き？

周りに被害を出す技を禁ず

戦闘は地上でのみ

勝敗は気絶若しくは決着したと判断した時終了とする

尚これは橘 蓮次の力量を図る上での試合であり、橘平蔵も了承している

ふ……ふっざけんなドチクシヨーーーー！！！！

寝る前から百代の視線が無くなったのはこれが原因！？

明らか軽くの度合を超えてんだろ！

これじゃ殆ど死合いと変わらねえじゃねえか!?

ちくしょおおおおおお!! 川神の奴らなんて大っ嫌いだ  
あああああ!!



## だいにわ(後書き)

とりあえずなパラメータ

橘 蓮次

HP	95500	精神スキル
EN	800	・鉄壁
運動性	130	・直感
装甲	3000	・不屈
		・ド根性
		・????
攻撃力	0	・魂
	9000	

川神百代

HP	????	精神スキル
EN	999	・直感
運動性	160	・威圧
装甲値	2500	・加速
		・ド根性
		・????
攻撃力	0	・激怒
	9999	

書いてみたら大概主人公もバグキャラ…でも百代は更にバグ

とりあえず此処でみなさんに聞きたい

変な事を聞いているのは百も承知ですが結構マジな悩みです

それは

戦闘は後でゆっくり直すからとりあえず物語進めていく

というもの

何というか…書いてても真剣というよりギャグにしかならないという不思議現象に陥っているのでorz

先に物語進めた方が良くないかなと思ってしまっているので皆様の意見お願いします

## だいさんわ(前書き)

ここで前回までの投稿分終了

これからちよつとまが空くと思います

それと感想の方なのですが返信している最中に一つ見当たらなくなつてしまいました

作者が間違つて消してしまつた事を考え此処で謝罪させて頂きます。

折角頂いた感想、本当に申し訳ありませんでした。

だいさんわ

町の連中まで巻き込んだ一大イベントにまでなってしまった……

しかもある程度ではなくトコトンまでやる羽目になった……果てしなく鬱だ

とりあえずこの騒ぎを引き起こした風間ファミリーにはきついお仕置きが必要だろう

「さて……申し開きは何かあるか？」

「そんなものはない！デカイ祭りなんだから盛り上がりなくちゃ損だろ？」

「デカくしたのはお前らだろうが……！」

元々は軽い力試してみたいなものが何だっつて町の連中まで巻き込んだ  
一大イベントに膨れ上がっつてんだよ!!

お陰で俺に賭けてるやつらから真剣な表情で『期待してるぜ』や『  
負けたら承知しねえぞバカヤロー』とか言われまくっつたんだぞ!?

「何言っつてんだよ!やるからにはトコトンやるに決まっつてんだろ!  
!」

「それに俺を巻き込むんじやねえええええ!!」

変わっつてない、全く変わっつていないよこいつ。

昔から自由人だったが年喰つて大人しくなる所か思いつきしパワー  
アップしてやがる。

いやまあ、そういうこいつの生き方は気に入っているんだがな……  
頼むからそれに俺を巻き込むな。

「ま、まあまあ落ち着いて下さいよ」

「うるせえ！大和お前も一枚噛んでる…つか共犯だろうが！！」

風間がこういう事をやらかす裏ではこいつが何時も関わっている！  
軍師なんて渾名がついている理由の一つだ

なにせ人間関係を含めて計算に入れている……性質が悪いにも程がある。

「そして逃げられなくなった、完全包囲だね」

「分かってたんなら止めるよ！？」

「それは無理、私は大和の愛の奴隷。逆らえないもの」

「逆らう気すら無いの間違いじゃないのか？」

「おお、私の事よく分かってる」

ええい10点GOOD以前にお前も全く変わってないからだよ！

相変わらず大和一筋じゃねえか！

「うん、それはこれからも変わらないの」

「人の心を読むな！！」

親父もそうだが何で人の心読めんだよ！？

「がはは！往生際が悪いぜ？潔く百先輩と戦っちゃまえて」

「うるせえボケガクトオ！！」

「ほぎゃぱらっ!？」

10 m程吹っ飛ぶガクト…ヤツベやり過ぎたか。

まあガクトだし大丈夫か？

「イテエじゃねえか!！」

やっぱり大丈夫だった…ギャグ補正でも付いているのか？

「ちょっとやり過ぎ、でもガクトも一言多かったね」

そう言ってくれるモロ…お前だけだよそう言ってくれるの

はあ……全く変わらないコイツ等に喜んでいいのか悲しんでいいのか…まあ嬉しいからいいか



「なんかもう怒る気が失せた…そっぴゃワン子何処だ？」

「ああ、何時もの走り込み。10分ぐらい前に行っちまったよ」

運が良いというより野生の本能で危険を察知したみたいだな…無自覚だが

そっぴゃ百代の奴は何処行った？いや別に会いたくないけど

「姉さんはもう河原に行ったよ。此処じゃ院が壊れるかもしれないから場所が河原になったんだ」

「壊れる事よりもギャラリーが居ても大丈夫なようにしたって感じがするけどな」

賭けまでしたんだ、当然見物に野次馬がワラワラと来るに決まってる

まあ前回も門が半壊した上石畳がやばい事になってたしな…修復作業手伝わされたし。

「はあ…そついや何時の間に掛札なんて作ったんだ？」

俺が昨日来たのが昼前だった気がするんだが？

そして精神的疲労で爆睡したのが6時になるか成らないか位だったし

「おう、昨日ワン子が蓮次の事を伝えに来てから全員で作ったぜ！」

「もう殆ど徹夜だよ」

「寮に帰ってからも作ってたしね」

な…なんて無駄な事に労力使ってたんだこいつ等

「因みに勝負の賭けは今の所姉さん優勢…ていうか学生はほぼ全員姉さんの方に賭けてるね」

「ま、百先輩の活躍知ってる奴は大抵そう思うだろうな」

「この前は不良20人瞬殺だったもんね」

「つつかこの辺りの不良グループは軒並み返り討ちにされてっからな。」

「しかも全員負けた後にあれだけされてるから仕返しも考えないと思うし」

聞けば多数で仕掛けて来た時や武道の礼を欠く愚か者には更なる鬼畜な方法で止めを刺すらしい

最近人間ジエンガを作ったとか、自業自得だとは思つが本当に鬼畜だ。

……手なんか抜いた場合には俺も対象になりそうだ。

「ま、やるからには手なんか抜かねえよ。そんな時は百代以前に親父に矯正される」

戦いの心得とか姿勢とか思いつきり叩き込まれた。

ま、基本放任主義だがしつかりと重要な部分においては一切の妥協しなかったし

「おう！勝ってくれないと大損だからな」

「どっちにしたって面白そうなのが見れるのは間違いなさそうだしな」

やっぱり少しメとこつかと思っただがそれよりも先ずは！

「だがその前にテメエ等俺を賭けの対象にした罰として飯奢れ！！」

呆然とし過ぎて飯逃したんだよ!!

とりあえずラーメンを奢らせた

腹はいっぱいにしなかった…絶対吐くし

はあ…百代と対戦か…面倒な事に成らないように祈るしかないか。

ギャラリーの方は爺さん達がなんとかするだろうが…負傷は出来れば骨折程度ですませたいなあ。

断頭台に向かっていている気分だったが、どこか興奮した自分が居たのも確かだった。

はあ、武士つてめんどくせえ…だが、悪い気はしないんだよなあこ

れ  
が

だいさんわ(後書き)

前書きでも言ったが投稿分は使い果たした！あとは書くのみ！！

それとこの場を借りてあちら側で質問された事に関して問いたいの  
ですが

風間ファミリーの蓮次に対する呼び方でやはり先輩とかさんとかの  
方が良いでしょうか？

あそこの連中特にガクト辺りは呼び捨てでも違和感が無いんですよね

質問の続く後書きですが、気まぐれでも付き合っていたらけると幸  
いです

だいよんわ(前書き)

フハハハハ！レポートと卒論の中間発表という地獄を抜けて俺は生還したぞ！

ちよつとどころではなかったですねすみません。

とりあえず、在る程度が完結したら書きなおそうと思っています

他の作者さん方の才能が羨ましいです。



だいよんわ

おー、おー、盛況だ事…会場のテンションは鰻登り！だけど俺のテンションは急降下

少しはやる気になった俺だが光景を見れば少しは分かると思う…  
なんで！川神院の奴らまで店出してやがんだ！？

川神せんべい、川神まんじゅう……温泉街か！？

あゝ、もう時間だったのに会場はお祭り騒ぎ……対戦場から軽く5  
0メートルは離れてるのはまあ正しい判断だ

てワン子も何気に弁当配ってる！？

どんだけ商魂逞しいんだよ！

そしてそんなお祭り騒ぎとは別に禍々しいというか猛々しいというかそんなオーラがにじみ出ている場所がある

まあお分りの通り発信源は百代。既に開始地点で瞑想していた……のだが

何故だ、精神統一の構えなのに怖気がする……ああ、成程俺をボコすのに精神を集中させてる訳ね

あんまり気付きたくなかった。

とりあえず精神を集中すると共に軽く自分へと暗示をかける

百代は怖くない、怖くない、親父よりマシ親父の折檻よりマシだ

自分で言ってるアレだが意外と効果はあった

逃げれば土道不覚悟、親父のとんでも折檻があると考えれば百代への恐怖は引っ込む

「東方 川神百代」

「ああ！」

「西方 橘蓮次」

「…ああ」

「いざ尋常に…始めい！」

「いくぞー！」

開始の合図の直後…否言い終わるのとはほぼ同時に百代の一撃が放たれる

正に雷の如き速度と威力を持って両者の間合いをゼロにし、その凶悪なアギトを蓮次へと突き立てた

「…え？」

それは誰の言葉だったか、少なくとも会場に居た大半の人たちの共通していた認識だ

如何なる相手をも有象無象の如く蹴散らし、圧倒的な強さを誇る川神百代が“殴り飛ばされている”など誰が想像出来ようか

飛ばされた百代はクルリと一回転すると何事もなかったかのように立ち上がった

その顔に獰猛な笑みを浮かべて

「相変わらず頑丈な奴だ、中々面白い事をするじゃないか」

「伊達に親父と殴りあってねえからな」

K A T A R I A IとかK A T A R I A Iとか…あとまあ伯父貴と親父のK A T A R I A Iに巻き込まれたりとか

元々頑丈だったのがあれですっかり強化されてしまったわけだ……  
それでも親父に負けるけど

「いいな、いいぞこれだ！まだまだ私を楽しませてくれよ！」

「上等だ！かかって来いやあああああ！」

「ほつ、蓮次の奴もまた随分と無茶をするわい」

「無茶過ぎヨ、少なくともワタシは絶対にやりたくないネ」

否、思い立ったとしても実行に移す事が不可能に近い

なにせ百代を殴り飛ばした方法が相打ちでの殴り合い

本気の百代の一撃を受けた上での相打ち形式のカウンターなど自殺行為に等しいからだ。

「相変わらず頑丈な奴じゃわい、この戦い面白くなるのう」

「あんなに楽しそうな顔をするのは九鬼揚羽さんとの戦い以来かな？」

まるでお気に入りの玩具で遊んでいるように戦っている百代

全力で戦えるのが楽しくて嬉しさが滲み出ているのが分かる、そしてこんな顔をさせる蓮次に二人は感謝したかった。

おかしい、なんでコイツこんな元気なわけ？

さっきの一撃鳩尾に入った筈だ、いくら百代っても人間なんだから少しは効く筈

「戦いの最中に考え事とは余裕だな！」

「冗…談!！」

ゴッ!という空気を裂く音と共に放つ襲撃

百代は紙一重で避けるが頬に一筋の裂傷が出来る

「あ、すま…ん!？」

流石に女性の顔に傷をつけてしまった事に謝罪する、否しよつとした途端にそれはおこつた

傷が消えた、塞がったのもなくその瞬間傷など無かつたかのように綺麗さっぱりと“治つた”

「瞬間…回復…だと？」

瞬間回復…武術を極めたものが得ることが出来るという最終奥儀

その名の通り傷はおろか疲労すらも瞬時に全快状態まで完全回復す



るといふ規格外の代物

「てめ……そりゃ反則だろ」

親父や叔父貴も使える為その驚異は骨身に染みている……まあ兄弟喧嘩に使用するものだしな

壮絶な殴り合いのKATARRIAI…殴った傍から回復してっから何時までも決着がつかず一種の永久機関みたいになってるが

殴った衝撃波が辺りに遺憾なく発揮されるというはた迷惑な代物ではあるが

「あの敗北から修行を積んだんだよ、お前とこうやって戦う為になんか？」

「それは……光栄な事だな」

自分の顔が引き攣っているのが分かる

何だそれ？修行たって、たった五年で瞬間回復取得なんてどんだけ



どこぞの奇妙な冒険な方々のような叫びとラッシュの嵐

既に眼では追えない程の豪雨の如き数と速度、そして岩をも砕かんとする力

迫りくる拳を捌き、あるいは相殺し、それでもお互いに当てて当てられる

空を裂き、衝撃が大気を振るわせる

正に殺戮領域といった空間だが、何よりも恐ろしいのはそれをやっている当事者達だ

殴られればより強く、より早く、蹴りを、膝を、肘を相手へと繰り出す

加速していく戦いは均衡から徐々に蓮次の劣勢へと変わっていた。

単純な話、蓮次の体が限界を迎えて来ていた

瞬間回復の恩恵で回復し続ける百代とダメージを蓄積していく蓮次、当然の結果といえる。

「どうした蓮次！動きが鈍ってきたぞ？」

「はあ…はあ…まだまだ、こんぐらい余裕だ」

嘘です、正直言ってヤバイです…さつきから骨が軋みやがるし体中にガタが来ているし！つか実際何本か罅入ってるんだよ！！

そんなボロボロの俺と比べて百代は全くの無傷…つか受ける度に回復してるからどれだけやっても初期状態に逆戻り……理不尽すぎるぞちきしようめ！

どれくらい理不尽か例えると、スパボのラスボスがターン毎にHP、EN共に全回復するってぐらい理不尽だ

しかも自機は一機のみでとくる、自分で言ってるんだがどんな無理ゲーだよ

因みに状況的には俺でかなり中破よりな小破で百代が…？？でHPフルMAXな状態

圧倒的な戦力差で絶望しかねえよ！

それでもやるしかないとはいえ現状は非常に厳しい……が、まだ

やれる事はある

腕が、体が、筋肉が、骨が悲鳴を上げる

待つのは本気の一撃、二の打ちなど要らぬとばかりの一撃・・・まあ百代の場合ジャブだけで大抵は二の打ち要らずなんだが

勝負は一度、二度目はない・・・だからこそ待つ、その一撃を見逃さぬようにしつつ全力で応戦しながら

そして、何十、何百回目かもわからない数の攻撃の果てにその一撃は来た

文字通り岩をも砕く一撃を持ったそれを前に

っここだ!!

俺はこの戦いで初めて百代の攻撃を避けた

拮抗していた力の唐突な消失で百代の体が一瞬頼りなく泳ぐ

だがその一瞬が何よりも欲しかった

腕を、肩を掴み片足を百代の足の間へ滑り込ませる

仰向けに自ら崩れながら繰り出すそれは柔道の巴投げとにているがこれは違う

少し前に神 町で覚えた技、巴狩りという業のその応用

グルンと百代と共に回転し、百代を自らの下へと押しつけると共に素早く両手首を押しさえつける

「…捕まえたぜ百代」

キヤーとかウオオオとか聞こえるが全部無視だ

まあ今の俺の状態って女性を押し倒した男って格好そのまんまだし  
……鬱だ

「いくら回復出来ても押さえつけねば動けねえだろ？」

「ふふ……そうだな、確かに動けない」

両手首、そして胴体を抑えた

上からの押さえつけ、いくら百代とはいえそう簡単には外せない・  
・・そう、 “簡単には”

70

「が、まだ攻撃の手段は残っている！川神流 “大” 人間爆弾」

「ちよっ！？馬鹿おまつ……」

瞬間、世界は白く塗りつぶされ

そして一瞬遅れての轟音と衝撃波が世界を更に蹂躪した

~~~~~とある修行僧のコメント（一部）~~~~~

「あの時私は思いました、あああの人死んだなど。」

「光で目が眩みましたが確かに見えました、極太の気柱が立っているのを」

「私は蓮次殿を尊敬しています、あの人のおかげで今の百代殿が居るのですから」

~~~~~コメント終了~~~~~



「あゝ……ちょっとやり過ぎたか？」

爆発が治まった後の惨状は一言で言えば滅茶苦茶である。百代の放った爆発の衝撃は僧達の結界を砕き、屋台を吹き飛ばした

観客も爆風に煽られて死屍累々の阿鼻叫喚の図だ、そして爆心地である百代を中心に巨大なクレーターまで存在している。

その威力は推して知るべし

「ぜえ……ゼエ……どこが……ちょっと……所だ……！  
！」

視線を向けるとそこにはボロボロな上にズブ濡れ状態の蓮次の姿

見るからに息も絶え絶え、満身創痍である……がその背後には気炎が立っていた

し、死ぬかと思っただわ！！危うく消し炭になるとこだったに上溺れかけたぞ！？

おかげで何本か完全に逝ったのと叩きつけられた際に頭打って血がダラダラとで踏んだり蹴ったりだ

まあそれは俺の未熟さだと思っただ許せるが、流石にこの状況は許せんわ！！

よって

「親父直伝・・・鉄拳制裁じゃこらあああああああ！！！！」

ガゴソツ!!という人体にあるまじき音を立てて百代を地面へと殴りつけた

と同時に腕から嫌な音がした・・・完全に折れたな

「ぜえ…ぜえ…この大馬鹿!はあ…ぜえ…大人間爆弾なんか使いやがって」

「ぐ…なんだ今の拳骨は?避けるどころか防御すらできなかつたぞ」

「ぜえ…親父曰くツッコミと愛ある拳は防げねえんだとよ!」

因みに俺としてはツッコミのほうは防げないんじゃないやなく甘んじて受けるものだと思う

序に言えば愛ある拳は教育的指導とも同義であるとも思う。

「・・・それは遠まわしな告白か?」

「違うわ！何処の世界にこんなげほっ・・・暴力的な告白があるか！？」

そもそもお前に対してんな甘い感情なんて持ちあわせてねえよ！

あ、やべっ興奮したら血が・・・

ブシュ！とばかりに頭から勢いよく噴き出す血

今の俺の顔は漫画ばりに真っ赤になってるんじゃないだろうか？

ははは・・・世界が揺れてるぜ

そして俺の意識はあっさりと闇へと落ちた

頼むからもう百代と戦うのは勘弁してくれ

## だいよんわ（後書き）

まず最初に謝るときです

スンマセン！自分でも駄文だと思うけど投稿させていただきました！

ただどこれ以上やってたら前と同じく立ち消えしそうなんで投稿しました。

次回は早めに投稿させて頂きますのでなにとぞご容赦を

だいごわ(前書き)

第五話投稿です

なんか最近真剣恋の内容が薄れつつある気がする

でもやる時間がない！？睡眠時間を削ってちよくちよくやりなおすかな





この事により二日ぶりに起床した俺は痛みのみあまり悶絶、しばらくの間生き地獄を味わう羽目になった

最悪の目覚めだチクショウ！！

とりあえず先日の百代との試合で俺が負った怪我が以下の通りだ

頭蓋骨とその他小さなものを含め全身の42か所の骨に亀裂、単純骨折4か所、粉碎骨折2か所

筋肉断裂、打ち身、打撲、毛細血管破裂、貧血を含めると数えるのも馬鹿らしかったらしい

全治3カ月位は軽く突破する程の重傷である

何で百代と戦う度に俺は死にかける程の大怪我をせにゃならんのだ  
！？

「まあ、お主なら一週間で完治出来るじゃろ」

とは鉄心爺さんの言葉、まあ実際それ位か若しくはそれ以下で治る  
けどさ

内養功習得して本当に良かった！まあ素の回復力をレオ達に人外だ  
と言われてるんだけどな・・・言った後レオ達には地獄の訓練を敢  
行させたが

俺だって好きでんな回復力なんぞ手に入れたんじゃねえよ！

まあ、と言う訳で現在進行形で傷を癒やしている俺ではあるが

別な傷が現在進行形でグリグリと開いていくのである……心の傷  
がだ

「あのさ百代、俺今見ての通り療養中なんだが」

「ん？なんだ私が此処に居るのに何か問題でもあるのか？」

だったらその隠しきれない鬨気をどうにかしろよ！？

俺の精神がガリガリと削れる……てか削れてるんだよ！！

「……………」

「……………」

何この無駄な緊張感！？

誰かこの人如何にかしてくんない？このままじゃ胃に穴が開くぞ！

「あ、お姉さま！私に修行をつけてください！！」

ワンコ助かった！お前には後で飯おごってやる！！

しかし本当にどうにかしないといけない、とりあえず夏休みになれば向こうには一時的にしろ戻れるからそれまではなんとかせねば

「ひとつ言おう・・・なんでこうなった？」

「それは・・・蓮兄さんが姉さんに勝ったからじゃないかな？」

「どう見ても百代の勝利だと思うがな」

俺ダウンしたし、百代ピンピンしてるし・・・試合に勝って勝負に  
負けたってのの見本っての

・・・  
なんか百代と戦うとどっちにしたって勝った気が全然ないんだよな  
・・・

「規則を破ったのは百先輩だしな、まあそのおかげでこっちは儲か  
ったけどな！」

そう、ルールに記載されていた“周りに迷惑をかける技の使用禁止

”を見事に破って惨劇を創りだしたのは百代

そのおかげで俺はボロボロ、怪我が治った後には河原の修復をやらされる事になっている・・・なんとってクレーター出来てるからな

「この理不尽な現状の不満をお前等にも分けてやりたいよ！つかどうにかして俺に平穩をくれ！！」

「無理だな！」

「無理だね」

「即答すんじゃないねえ！」

このままじゃストレスで穴が開く、かといって解決方法も物理的に俺に被害が及ぶし下手したら更に状況が悪化する

うがああああ！態と負ける事が出来ない教育と性格が恨めしい！！

「いや蓮兄さんが居ると姉さんの矛先がそっち向いてくれるし」

「押しつけない！こういう時こそ助け合つのがもんだろ！？弟として姉をどうにかしろよ！！」

伊達に何年も一緒に過ごしてねえだろ！こう言う時こそお前の力の見せ所だつての！

つか俺より付き合い長いんだから百代の鎮め方の一つや二つ知ってるんじゃないかねえの？

「いや姉さん戦いの事になると目の色変わるし」

「ここん所不良や百先輩に一撃でやられるのばっかだからなく、相当蓮次が来たのが楽しいみたいだな！」

「心を読むな！てかその言い方だと俺の扱いが新しい玩具って感じじゃね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そこで沈黙するのかよ！？」

京の場合

「とりあえず、どうしたらいいと思う？」

「どうしようもないの、即諦める」

「お前諦め早ッ！つかもう少し考えてから喋れよ最初から考える気ないだろ！？」

「百先輩がそっちに構っていればその間大和を独り占めできるもの」

「自己の欲望丸出したなおい！？」



相変わらず自分に素直・・・いや、愛に素直なのか？

ぶっちゃけ優先順位が大和>>>>風間ファミリー>俺>>>その他って所か？多分おれはもう少し低いのかも知れんが

聞けば毎日必ず一回は告白するらしい・・・そしてすべて失敗するというのが既に半分日常の習慣になっているらしいとは大和の談

さっさと領けばいいと思うがはて、何が不満なのだろうか？

「まあいいや、お前に頼むのは流石に無理か」

大和の言葉だったら全力で対処するんだろうが

「勿論、大和の為なら私は火の中水の中大和の中へと厭わない」

「いや、最後の違うだろ。つか心を読むなんての……………」

なんか……………スゲエ疲れる

今度大和にけしかけるか？ストレス解消にそれも面白いかもしれな  
いな

「おお！それは是非実行してほしい」

「だから心を読むなど言ってるだろうが！！」

## ワン子の場合

「ワン子、百代の事で相談がある」

「え？お姉様は最近すっごくたのしそうだよ？」

キョトンと本当に不思議そうに首を傾げるワン子、ええいこの天然・  
・・というかアホの子（弱）か？

昔より犬っぽさが増えた気がする・・・まさか犬みたいに笛吹いた  
りボール投げたりするのに反応したりは・・・まあないだろ流石に

「いや、愉しそうなのは分かる・・・当事者つか対象者？だし（ポ  
ソッ）」

「お姉さま、去年に揚羽さんと戦ってからお爺ちゃん以外で全力で  
戦える人が居なかったんだから」

あゝ成程、数少ない好敵手が居なくなっただんで力を持て余してる訳か  
まあ実際やったから分かるんだが今のアレ相手じゃ四天王の連中総  
出でも無理かもしれん

瞬間回復を破れば話はまた違ってくるが・・・アレを破るのは並大  
抵じゃ無理だろ

「だから正直蓮兄が羨ましい、お姉さまが満足する相手って今のと  
ころ蓮兄位だもん」

それでもこの様なんだが・・・あのバトルジャンキーと戦うのはい  
つも命がけなんだよ？

勝利しても敗北感が強いという良く分からん結果になったし

「それでもお姉さまに勝ったじゃない」

「ワン子・・・俺はひよっとして悟られか何かか？寧ろお前等が俺限定のサトリかなにかか？」

「はえ？」

「いや、何でもない」

その後はとりあえず時々ワン子の訓練に手伝事を約束した

なんでもワン子は百代みたいになりたいそうだ・・・訓練を手伝うのは良いけど百代みたいなバトルジャンキーにはなってくれ  
るなよワン子

ガクト&モロの場合

面倒なので以下省略！

似たようなやり取りを繰り返すのは不毛だ

とりあえず、真面目に心配してくれるモロに感動したが

横でニヤニヤしていたガクトには無事な腕でのアイアンクローで沈めた。

ジムに行って体を鍛えてるらしいが、どうせならガクトに武術を教えるのもいいかもしれない

そついや川神学園に拳法部はあるのか？

後で鉄心の爺さんに聞いてみるか

その後は他愛ない雑談で終了

対策は二人揃って無理だと言われたよちくしょう！！

結局何も解決への糸口は見つからないのが良く分かった

とりあえず傷が治ったら時間を見つけて鍛えるか・・・流石に次や  
つたら死ぬかもしれんし

それに対百代戦用に考えてたあの業、こりゃホントに頑張って習得  
した方が良いな。

それにしても俺はここに実習生として来た筈なのに  
！

何で命の危機を味わなきゃならんのじゃああああ！！

俺の平穩力アアアアム！！バアアアアアアック！！！！



## だいごわ（後書き）

次回辺りにアイツを出そうかなとは思っています。

そついやこの小説にヒロインは居る、もしくは要るのだろうか？

ギャグ的な要素は考えてあるんですがね

だいろくわ(前書き)

何故か投稿時間がこの時間になるのは何故だ!?

誓って言うが態とではない

だいろくわ

怪我から5日、ようやく怪我が完治した

そして怪我をするよりも頑丈になったのだろう、親父の扱きを受ける内にどこぞの野菜人の様な特性が出来てしまった俺ははたして人間かと偶に思う事がある

因みに頑丈になるだけで爆発的に強くなるなんてもんは無い、百代だったら出来るかもしれないが

もう俺は百代が めはめ波を撃つても驚かん・・・というより出来るんだろっつな多分

俺も似たようなの出来るし

・・・あれ？気を全面解禁しれ百代と戦うとヤバくね？

飛び交う気弾と怪光線、広範囲に渡って怪獣大戦争並みな破壊痕が刻まれる光景が容易に想像できる

そう言えば前回の俺との戦いでクレーターが出来た河原だが、川の水を引いた奴がいるらしく池のような状態になっているらしい

というよりも一種の観光地？になっているらしく暫らくの間は修復が出来ない状況だという

まあ純粋な戦いであんなクレーター出来ちゃ興味を持つ奴らが来てもおかしくないが

絶対にバカが増えるんだろうな・・・そして百代に処刑されると

前はジェンガだって言ってたから次はピラミッドでもやるのか？無論トランプの方のだが

まあそれは別にどうでもいいが

この五日間の間でちょっとした事件が起きた

3日前に四天王の一人橘 天衣が何者かに敗北したらしい

因みに他の四天王は百代と乙女それに揚羽の三人で、現在の武道四天王には一人も男が居ないという男としてなんとも悲しくはある

四天王の一角が倒されたとあればその相手はそれだけ強いという事で

俺はその天衣とは一応親戚という関係になっているという事だ

つまり、俺ならば天衣を倒した奴を知っていてもおかしくないという結論に達した百代が俺のところに来るのも当然ということである

傷を治しながらも訛らない様に少しずつ動く天衣の奴を倒した奴の事を教えると詰め寄ってきた奴は恐ろしかった

興奮冷めやらぬとは良く言ったもので、キラキラ・・・いやギラギラした目で俺をガクンガクンと揺さぶってきた

鉄心の爺さんが止めてくれるまでの約五分間は地獄だったよ

急速に回復しているとはいえ重傷だった箇所はまだ治っていない訳で・・・解放された後しばらくの間は痛みが引かなかった

因みにその後天衣が負けた事に関しての事を逆に聞く羽目になった俺に対しての二人の茫然とした顔は忘れられない思い出となったがな

序に言えば今も俺は天衣の奴が誰に負けたのか知らん

いや、俺あいつの番号知らないし・・・そもそもあいつはこの期に修行に励んでリベンジの準備をするだろうから

興味があるだけで聞くのは失礼だろう、まあ噂じゃ剣士だったとか聞くけど

けど武道四天王ってのは有名だが、有名な事ってのはそれ故偽物の情報が多々流れることでもあるからあまり信用できない

一説にや山の様な大男だとか、可憐な少女だったとか、妖怪だとか拳句にや宇宙人だとか言う噂もある

まあそう思えても仕方ない人物を一人知っているが、色々情報が錯綜している中で俺が選んだのは

先ず剣士で性別は最近の状況からして女、歳はまあ知られてないって事から揚羽や百代と同じ位か少し年下ってのが可能性が高いな

後はまあ天衣に勝ったのにも関わらず名乗りを上げない事を考えてちよいと内気な感じか？

まあ、天衣を破った実力は気になるが会う確率は低いだろ

探すにしても実習がひと段落してからだからな、まさかうちの学園に入学とか編入とかするなんてないだろうし

とまあだいたいこんな事があつた訳で

目下鉄心の爺さんと百代は全力で搜索中、俺は現在学園に挨拶しに移動中

だっ たんだが

なんだか物凄い嫌な予感がするのは気のせいか？

具体的に言えば俺の会いたくない連中ベスト4に入る奴と鉢合わせするような

そして同時に決してそれからは逃れられないという妙な確信も

目の前には橋があり名は『多馬大橋』、なんでも別名変態の橋という非常に不名誉な橋だ

まあそれには非常に納得できるが





高笑いとともに響くガラガラと鳴る何かが引かれる音

「おいおいおい……この声はまさか」

そしてその音の方へ視線を向ければそこにあつたのは

見覚えのあるメイドと人力車だつた

キキツと横の道路に止まるメイドと人力車

「久しぶりだな、我が義弟よ!!」

そして人力車から現れたのは金色の制服を着た一人の男

「我こそは！！ 九・鬼・英・雄 ！ この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！！！」

背中の竜を見せながら名乗るこの男、名の通り九鬼財閥の・・・揚羽の弟である

秀囲気といい言動といい、非常に似た者姉弟であり

出来る限り会いたくない男の一人だった

「素敵です、英雄様！」

そしてパチパチと拍手をしながら英雄を称えるメイドで名はあずみ

英雄の傍を離れると本性を現す腹黒忍者メイドである・・・む、殺気が

まあそれはさておき

「英雄・・・何でお前が此処に居る?!つか誰が義弟だ!」

「フハハハハ!この九鬼英雄は元よりこの川神学院に通っている!故に我が此処に居るのは必然!!」

「そうですね〜 英雄様は入学時からずっとこの川神学園に通ってらっしゃいます」

「なん・・・だと・・・!?!」

明かされる驚愕の真実

これは畏か?畏なのか!?!すべては親父が仕組んだ畏なのか!?!?  
百代に引き続きなんで会いたくない奴がこう立て続けに出てくるんだよ!しかも姉じゃなくて弟の方なのは俺に対する嫌がらせか!?  
それが目的ならば大成功だ、俺のストレスは現在進行形で溜まりまくってるからな。実習が終わる前に居に穴があかない事を祈るばかりだよ。

「聞けば我がこの町を離れている内に中々の催し物が在ったそうではないか」

「その催しの所為で俺はこの有様なんだがな」

少なくとも、これから実習生として生活する上で非常に遠慮したい百代との戦いは文字通り命懸け、実習しに来たのにまた寝たきり状態になるのは本当に勘弁だ

「ハハハハ！謙遜するな！川神百代と戦って勝利を収めたのだそれ位の代償はあつてしかるべきだ！！」

「試合に勝って勝負に負けた感が強いけどな」

百代のルール違反だし、ピンピンしてるし・・・事あるごとに獲物を見つける肉食獣染みた視線やつてくるし！

まだ傷治ってねえのに模擬戦しようぜってさも当然のように誘ってくるんだぞあいつ！？

まあちゃんと向こうも加減してはくれているが、それでも怪我人を戦わせるなよ！

まあそれはさておき

「おまえらもいい加減諦めろよ、紋白との婚約も無かった事になっただろうが」

俺の何を気に入ったか知らないがこの姉弟は何故か俺と自分達の妹である紋白をくっつけようとする

どうしたのかって？紋白本人と一緒に直訴して白紙撤回させた

「婚約の話は別に破談とはなっておらん、保留になっているだけだからな」

「いや、紋白は俺を嫌ってる。大体それにだな・・・」

「フハハハ！そう言うな、アレも別にお前を嫌ってなどおらん！故に何の問題もない！！」

「紋白はまだ 学生だろうが!？」

「フハハハハ！お前が我の事を義兄と呼ぶ日を待っているぞ!!」

「永遠に来ねえよ!!」

そんな俺の言葉が届かぬうちに再び爆走していく人力車

何しに来たのだろうかあの男は

なんか・・・どっと疲れた

あそこの連中と話すと精神力がごっそりと削られる、姉の方は偶に体力も削られるが

「本格的に胃薬の用意をすべきなのかもしれん」

この歳で胃薬を服用って・・・漫画とか小説でしか見たことなかったんだがなあ

研修が終わる前に胃に穴が開かないことを祈るか。

あれから歩き続けてようやく到着したが

なんだ・・・親父のやつてる竜鳴館も変わった場所だったのは思  
ってたが

此処も負けず劣らずに変わった場所だったのは理解できた。

そしてとりあえず、鉄心の爺さんは美的センスが皆無だった事と此  
処が明らかに実習に向いていない場所だったのが分かったよ・・・



これから暫らくの間俺が世話になる仕事場、川神学園

とりあえずは外観であるが

校門がどこぞの寺院を思わせる純和風の大門で

屋上は何処かのデパートかと見間違えるほどな空間と化している。

この時点で色々言いたい事があるが次の教師陣の方は更にカオスである

とりあえず最初に異彩な人が約一名、なんなんだろうかあの……  
麻呂様？は

言葉使いや態度とかなら何も言わんが……なんでスーツに顔面白

塗り？どうせやるんなら服装も全て東方貴族にしとけよ！中途半端すぎてエセとしか見えないっての

序に授業内容が貴族時代がほぼ全てらしく、俺の受け持つ社会化？で近代日本やその他の事をも教えなければならぬのはコイツが元凶らしい。この学園はなんでコイツを教師にしているんだろうか？

次に俺が副担任になる2-Fの担任教諭小島 梅子さんであるが

バリバリの教育者・・・というか教師というよりも女軍曹というイメージが強い、あと何故か鞭を常備している。

巨人のおっさんから聞いた話じゃ教育的指導の下に厳罰として鞭を使うらしい・・・此処の生徒大丈夫なのだろうか？主に新しい世界に目覚める意味で

とりあえず俺が居る間はそんな生徒が出ない事を祈るしかない。

次に巨人のおっさんだが

・・・まあオッサンはオッサンという他ない、強いて言えば声の雰囲気にはラスボス臭がありそうな気がするがそれはないだろう

いい人つてのも知ってるし本職の代行業のほうで裏に詳しくかったりとするが・・・なんというか、日常姿を見ると少しマダオって見えてしまうのが残念すぎる。

因みに担当教科は人間学というこの学園独自の授業なんだが、なんか竜鳴館にも似たような授業やってたな。主に親父が教えていたがまあ、親父のテストの様に性別欄の男を漢と変えれば点数が付くなんてことはないだろうが

あとまあ此処の女子の体育着がブルマなのについて聞いてみたところ『ワシが居る限りこの学園はブルマじゃ!』というのが此処の方針らしい、もしかして竜鳴館がブルマなのもこの爺さんが原因なんじゃないだろうか？

ルーさんに聞いたら弟子達に拳以外にこのことも教えているらしいが、うん聞かなかったことにしよう。

教師人だけでこの濃さだ、ぶっちゃけ竜鳴館よりも変わった学園だ

なおい

親父に一言言いたい、ここは絶対教育実習生として来る場所じゃねえから！てか此処で教育実習を終えた人が普通の学園で教師になれるのか？

.....

だめだ、どう考えても”普通の教師”になる姿が浮かばねえ

元々特異な竜鳴館って場所を間近で見ってきたが、なんだって実習先までこんなぶっ飛んだ学校なんだよ！

.....というよりもまともな学校ってのがどういふものなのか

本気で分からなくなってきた

ん？風紀委員が真剣持って盗撮犯の車ぶった切るのって普通だよな？

学園祭でパフォーマンスで空から鉄塊を素手で叩き割るなんてのも・

……あれ？

自分の（非常に不安な）常識に亀裂が入りながらこの日の川神学院での作業を終えた

だいろくわ(後書き)

そろそろ本編入りたいな・・・

## だいななわ（前書き）

遅くなって本当に申し訳ありませんでした！！

暫らく書いてなかったから随分と文章がへたくソになってしまった・

・  
・  
o r z

だいななわ

学校訪問から一夜明け、早朝

「ねえ蓮兄、これ真剣ツマでやるの？」

「ああ真剣ツマだ、という訳で落ちない様に注意しろよ」

「わっ！？いきなり始めないでよ落ちる！落ちるってば！？」

自分で言うのも何だが傍から見れば何とも珍妙な光景に見える事間  
違くない

何せ逆立ち状態から片手で腕立て伏せをしている上、女子がその脚  
の上でスクワットをしているのだ

組み体操でもこんな光景は無いと断言できる

何でこんな事をしているかって言えば



事の始まりは約一時間前の事

） 一時間前 ）

療養中に衰えてしまった体力と筋力を取り戻すと共にワン子から言われた鍛錬を一緒に行うという約束の元

後ろにタイヤを3、4個引っ提げて町内をグルリと走っていたが

「そついえば前から聞いたかったんだけど、蓮兄ってどうやってそんなに強くなったの？」

雑談中にふと以前から思っていた事を聞いたワン子

その眼はキラキラしていて興味津々で有る事が分かる、純粹さが眩しく感じる程に。

「俺がどうやって強くなったか、か？」

んんん……咄嗟に思いつくのは親父と殴り合ったり親父と殴り合っ

たり親父と殴り合ったり　　ん？

思い出の大半が親父と殴り合ってる事しか思い浮かばない・・・だと・・・？

「・・・いや待て俺、良く思い出せ、流石にそれだけじゃあないだろ？」

「？」

咄嗟に思い出す事が父親と伯父による肉体言語の日々である事に焦る

俺の異常な頑丈の理由が見えた気がしなくもないが、とりあえずそれはさて置き過去に若しくは今の鍛錬をよ〜っく思い出す

121

50Kの重りを付けて鳥賊島まで遠泳したり、乙女達と手合わせするとか？

一抱え程ある岩を持ってうさぎ跳びをしたり親父みたいに道場破りで集めた看板で太平洋横断もしたよな・・・

そっついやこんな事もあったな

あれは中学生の頃だったか、親父にジャングルに放りこまれて一カ月間サバイバルをさせられたのだ

絶海の孤島だったし、何故か絶滅動物（肉食）がウジャウジャいたし、一度クジラ？に喰われた時はヤバかったな、内部から風穴開けて脱出したけど

しかしながら当時一番印象に残ったのは親父が気合いだけで島全体の猛獣共を気絶させた事だな

まあそれでも親父が所有している鳥賊島に比べたらマシだな

特訓云々での活用は全く問題ないが、島流しだけはヤバイ・・・あんな“良い子”になる理由ってのがわかる分特にあそこのヤバさが分かる

俺だってあの“良い子”状態から戻るのに1ヶ月掛ったから・・・危うく戻れなくなる所だったし・・・フッフッフ

「（生死の）限界に挑戦し続けられれば人間順応してくんだよ」

「え・・・つと・・・大丈夫？なんか顔色悪いよ」

「気にするなちょっと思い出したくない事を思い出したただだよ」

「そ……そう？なら聞かないでおくわ……」

フッフ、己の黒歴史が……痛い

「んで？なんでまた俺にそんなこと聞くんのだ？」

沈みかけた気持ちを無理やり直し、黒歴史を金庫に放りこみセメントで固めて海へ沈める

あの一時はもう二度と思い出したくは無い。

「アタシお姉さまみたいに強くなりたい、だからその為の努力は惜しまないわ！」

「まあ良いけど、言っとくが俺の修行法って無茶苦茶だぞ？」

先程の回想からも分かるが軽く死ねる

流石にジャングルでサバイバルやらせる訳にもいかん

え〜っとなんかあつたか……………？

此处で冒頭に戻る

「998・・・999・・・1000!」

「ほっ!・・・とと」

今迄揺れ動いていた足場との差異でフラフラするワン子

まあさつきまでバランスが悪かった場所に居れば当たり前的事

「んじゃ五分休憩な」

「了解・・・でも疲れたわ・・・汗も大分かいちゃったみたいだし」

汗をダラダラ流しながら言うワン子

それはそれだけ集中して先程のトレーニングをしていたという事でもあり

ニイ・・・

「それで良いんだよ、寧ろそうならなきや意味が無い」

「え?それってどづいづい・・・むむむ!」

ポフッ！と投げつけられたのはスポーツタオルとペットボトル

「さっさと汗拭け、これからは更にキツイんだからな」

「う・・・蓮兄、顔が凄く悪そうだわ」

失礼な

とまあそんなことをやっている内に五分経過

「ワン子、先ずはこれを着ける」

ワン子に差し出したのは黒い帯状の布

「鉢巻なんかどうするの？あ！もしかしてこれで気合いを入れるとか」

「すまん、説明が足りなかった、そりゃ目隠しだ。」

頭に巻こうとするのを止め見えないようしっかりと巻き付ける

試しに指を開いたりして確認する

「これでいいの？」

「見えなければな」

さて、準備は完了したが

俺の場合はジャングルでサバイバルを経験したから結構楽に出来たが

「さて、それじゃ今からやる事を説明する」

「はい」

「その状態で型を一通りこなせ、以上」

「……え？それだけ！？」

「まあ後はアレだ、転ばない様に注意しろ。」



単純だと思いが、意外とバランスを崩したりするので侮れないもので・・・

あ、こけたな

その後何度かバランスを崩したりしてなんとか終了

「いたたた・・・目が見えないと大変なのね」

「言う程悪くなかったがな、目隠しして最初にあれだけ動ければ充分上等だ」

視覚が奪われるとどうしても慎重に成りやすい、普段馴れた場所でもそれは変わらない

しかしながらワン子は少しばかり不慣れではあったが充分しつかりと型をこなした。何度も何度もしてきた積み重ねの賜物だな

「それで、これからどうするの？」

「充分動けたのでこれからステップ2へと移る」

「ステップ2？」

「やる事は簡単だ、その状態で軽く俺と模擬戦だ」

「え？」

「心配いらん、最初は加減してやるから」

まあ分かっている事と思うが結果は散々たるもの

俺とは全然違う方向に攻撃したりバランスを崩してこけるなど

当然俺の攻撃は避けられず額が真っ赤となっている

デコピンしまくったからな

「仕方ない俺もやってやるからちよいと攻撃してみろ、ああ本気で良いぞ？」

上段から袈裟掛けへの一撃を一步後ろへ下がって回避、直後にブオンという風切り音

足払い、逆胴、唐竹と次々に来る薙刀の斬撃をかわしていく

つか回を追う毎に段々殺気と共に威力が上がってくるんだが

結局攻撃はワン子がバテるまで続く事となった

こつこつのは下手に終わらせるより自身が納得するまでやる方が良い、身に沁みて実感するから

「なんで全然当たらないのよ〜！」

「理由は簡単、俺が視覚以外でお前を“観”てたから」

「え？目が見えないのに？」

「目が見えなくても他の事で観るんだよ」

「?????」

聴覚、触覚、嗅覚、気配・・・視覚が無くなっても他の感覚を研ぎ澄ませば良い

原理としては闇飯と同じだ、分からなかったらグ　　てくれ。

「簡単に言えば百代みたいに気の察知みたいな事をすればいいんだよ、まあアレの広さと精度は別格だが」

殺気や闘気ならいざ知らず、一般人の気をあそこまで精密に探知出来るのはそうはない。まあ百代は広範囲しかやらねえみたいだが

ホントに百代のスペックは天井知らずだな、だってあいつこういう事は本能でやってる節がある。間違いない

「もっと感覚を集中させる、気配にしても音にしてもしっかり捉えれば相手の場所位は分かる」

「む、じゃあ蓮兄はどんな事まで分かるの?」

「建物の位置や生物、あと大雑把な地形は分かる」

「……え？」

精確とはまだ言い難いが、修練を詰んでいけばこの域までは行けるだろう

もっとも死に掛けた事もそれ相応に有ったが

「心眼を完全に開けば目で見るのと相違ないらしいが、俺は生憎と其処までの域に達してねえからな」

しかも意識しないと使えない。完全に開眼するには視力を一度失い生死の極限状態に身を置くとかしないと至れないかもしれん

武の極みなんてものは一生掛っても辿りつけるかは分からないが諦める選択肢は元から無い、一生掛って至れる所までいだけだ。

「まあ俺がワソ子に教えられる事なんざこれ位だからな、覚えておいて損は無いぞ」

「うん！それならさっそく続きを始めましょ」

バツ！と起き上がるワン子

こついう只管に打ち込む姿は本当に尊敬出来る。ワン子の長所だな

「それじゃさっきよりデコピンの強さを倍にしてやるう」

「ええ”！！？”」

それから十数分後、修練が終わる事にはワン子のおでこは再び真っ赤になった

「グス・・・おでこが滅茶苦茶痛い」

「誰もが通る道だ、痛いのが嫌なら上達するしか道は無い」

「ニヤニヤしながら言っても説得力ないよ！」

「はっはっは、それが分かるんなら上・・・で・・・き・・・」  
「！？」

背筋にゾツと悪寒が奔った

ギギギギッと錆ついた体を動かさせてみればそこには

「よう蓮次・・・あたしの妹を随分と可愛がってくれたみたいだな？」

ゴゴゴゴッ！と音が聞こえそうな闘気を纏った百代

「今度はあたしと遊ぼうな蓮次」

いかん、調子に乗り過ぎたか・・・

長い一日に成る事を何処かで悟った蓮次であった。

だいななわ（後書き）

授業、レポート、就職活動、卒業研究・・・やる事多過ぎてパンク寸前だぜ・・・

執筆がまた遅くなるかもしれませんが本当に申し訳ないです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4365m/>

---

竜の息子

2010年12月13日21時34分発行